

東アジア児童文学のゆくえ ①

— 中国語と童話を巡る個人的な体験

成實 朋子

*東アジア児童文学という視座

今、上海の空港でこの原稿を書き始めている。

上海到着後すぐ、上海最大の書店、上海書城に足を運んだのだが、絵本コーナーが大幅に増設されていて、そこには日本の絵本がたくさん並んでいた。

私が最初に中国に来たのは三十年前のことだが、あの頃の書店には、西洋的な絵本、ましてや日本の絵本など一冊も並んでいなかった。手にとってみると、一冊三十元（五百円）くらいする。物価を考えれば安くはないが、それでも絵本を子どもたちに買い与えようという教育熱心な親が増えているということなのだろう。

中国の変化は本当にすさまじいものだ。子どもの本はこれからどうなっていくのだろう。同じ中国語圏である台湾や香港、そして韓国といった地域の児童文学は……。

この連載では、変動はげしい東アジア児童文学のこれまを簡単に振り返り、日本を含めた東アジア児童文学のこ

れからのゆくえを少し考えてみたい。国境線の中からはなく、東アジア児童文学という広い視座からながめたとき、日本児童文学の姿はどのようにつるのだろうか。

*中国語を始めた頃のこと

まず自己紹介にかえて、私が最初に中国に行った時のことから始めたい。全てのはじまりは、やはりここ上海だった。大学一年生の夏休み、「二十一日間シルクロードの旅」に参加することになり、大阪港から鑑真号という名前の国際フェリーに乗って、たどり着いたのが上海港だった。中国大陸が近づくと、それまでの紺碧の海が、一気に茶色い泥水となり、異国に来たという感慨が一気に募った。

中国に行くことになったきっかけは、意外かもしれないが、チェルノブイリ原発事故だった。夏休みにイギリスに語学研修に行くことを検討していた私に、帰宅した兄が、「ヨーロッパは危ない。アジアにしろ」と言ったのである。